

いのち
生命のにぎわいとつながり

No. 72

令和4年1月

印旛沼水系を中心として、千葉県内に定着・繁殖している特定外来生物カミツキガメ。令和2年1月発行のニュースレター No.64では、その防除の取組について紹介しました。その後2年間を経て、今号では、これまでの防除の成果と、今後の課題について特集いたします。

カミツキガメ防除の成果と課題



カミツキガメは、生態系や農林水産業等に影響を及ぼすため、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」により、特定外来生物に指定されています。千葉県では印旛沼水系において繁殖が確認されており、県は、平成19年度から防除に取り組んでいます。平成29年度からは防除の体制を見直し、さらに集中的に実施しています。カミツキガメ防除の専門職員が取り組んだ5年間の成果と課題について報告します。

CONTENTS

- 1 カミツキガメ防除の成果と課題 1
- 2 生命のにぎわい調査団の現地研修会を開催しました 3
- 3 文化の日千葉県環境功労者表彰を受賞 — 千葉シャープゲンゴロウモドキ保全研究会 — 4
- 4 千葉県の希少種（ニホンザル） 4

◎5年間の取り組み

平成29年度当時は、それまでの継続した防除にもかかわらず、カミツキガメの個体数は増加し続けていると推定されていました。そこで、ワナ数、作業従事者、作業回数を大幅に増やすと同時に、もんどりワナを用いた、より効率的な捕獲方法を検討しました。

具体的には、広範囲にワナを設置し、設置地点をGPSで記録することで、地点ごとのカミツキガメの捕獲状況を把握しました。それらのデータから、生息状況に応じたワナの設置数や間隔、点検の頻度などを最適になるよう増加させています。さらに、防除範囲自体も徐々に拡大し、現在は年間1,900以上の地点にワナを設置し、防除を行っています。

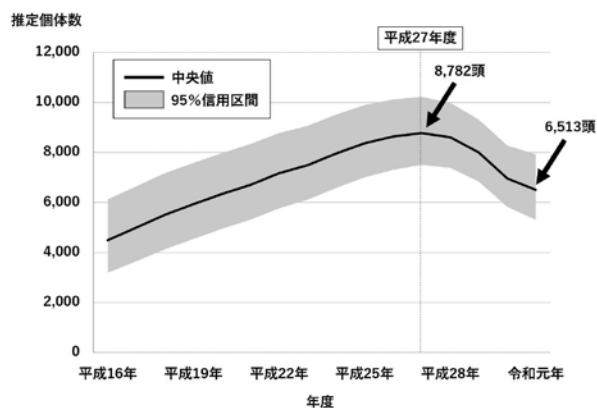
捕獲方法については、定置網や置き針など、他の方法の試行・開発にも取り組みました。しかし、それらの方法も、もんどりワナ以上の成果は得られませんでした。

また、これまでカメが活動せず、ワナの効果が低い冬季に有効な手段は確立されていませんでした。そこで、冬季に手探りによる捕獲を試行したことで、年間を通じて防除を実施できるようになりました（捕獲方法についてはニュースレター64号でも紹介しています）。

◎防除の成果

(推定個体数)

捕獲結果を基に令和元年度に行った個体数推定の結果、印旛沼水系に生息するカミツキガメの数は約6,500頭(中央値)で、平成27年度以降、減少傾向にあることがわかりました。



カミツキガメの個体数推定値の推移

(カミツキガメの好適環境の把握)

カミツキガメは水底を這うように移動し、水深の浅い環境を好む傾向があります。防除の結果からも、

生息・繁殖場所として水田地帯を利用していることがわかってきました。さらに、護岸されていないこと、植物が繁茂し水面を覆っていること、泥が適度に堆積していること等、カミツキガメにとって好適な農業水路の条件もわかってきました。中には、一本の農業水路で年間に70頭以上ものカミツキガメが捕獲されたところもあり、そのような農業水路は、越冬場所としても利用されていることが明らかになりました。



カミツキガメが多数捕獲された農業水路

(カミツキガメの移動傾向の把握)

水田地帯では、集中的な防除の開始後3年が経過した頃から、捕獲数の減少など、防除の効果があらわれませんでした。しかし、捕獲数がゼロになった場所はまだまだなく、河川・沼では、捕獲数が増減を繰り返しています。これは、カミツキガメが周囲から移動しているためと考えられます。実際に発信器を用いて追跡したところ、水田地帯と河川・沼の行き来が確認されました。このことから、限られた範囲の防除や、短期間の防除だけでは効果は得られず、継続的な防除や、他地域からの侵入防止が重要であることが示唆されました。

その他にも、防除の結果を通して、活動時期、成長速度、越冬環境、孵化幼体の生息環境などの生態が明らかになってきました。これらの詳細については、今後、生物多様性センターの研究報告等で発表していきます。

◎課題

集中的な防除により個体数こそ減少の傾向にあるカミツキガメですが、現在も印旛沼周辺の広範囲に生息しています。引き続き集中的な防除を行いつつ、今後、さらに防除が進み、生息密度が低下した状況

でも効率よく個体を捕獲する方法の開発が大きな課題となります。また、事業の拡大や、高齢化などによる防除の担い手の確保も課題であり、効率的な防除方法の開発とあわせ、検討していく必要があります。

新たな方法としては、一定の範囲を「根絶試行地区」とし、地区内の生息数をゼロにする方法を検討しています。これは、水路を塞ぐようにワナを設置して、移動してきたカメを捕獲する「水路封鎖」を行うものです。

千葉県では、最終的な目標であるカミツキガメの根絶に向けて、引き続き防除に取り組んでいきます。これからも、この取り組みを見守っていただき、外来種の問題に関心を持っていただけると幸いです。

(今津 健志 千葉県生物多様性センター)

**生命のにぎわい調査団の現地研修会を開催しました
令和3年10月27日(水)・30日(土)**

今回の現地研修会は、いちほろクオードの森(市原市)で房総丘陵の自然を観察しました。

前回同様、新型コロナウイルスの感染拡大防止対策をしっかりと講じての開催となりました。当日の参加者は27日(水)が15名(申込者19名)、30日(土)が27名(申込者39名)でした。

27日はあいにくの天気で雨の降り方が時間とともに強くなり、ヤマビル活動も活発でした。研修会終了後、スタッフからトランシーバーを回収すると、ヤマビルがシールのようにピタッと張り付いていました。30日は快晴の中の気持ち良い研修会となりましたが、気温が高めなのでヤマビルが這い回る中での研修でした。

遊歩道を歩くと、イノシシが餌を探して地面を掘り起こした跡をよく目にし、下見では確認できなかったリンドウが咲き始めていました。小川ではコオニヤンマやオニヤンマなどの幼虫、スジエビ(千葉県レッドリスト:D)、ホトケドジョウ(同:C)、ヒガシシマドジョウ(同:C)など、予想以上に多くの生き物を観察することができました。

また、27日に観察できたクロメンガタスズメの幼虫が、30日には蛹化のため土中に潜ったらしく見当たらなくなり、冬に向けた生き物の動きを感じることができました。

研修会後半は千葉県で最も源流に生息するタゴガエルのメスを捕獲し、透けた皮膚からお腹の中の卵を観察したり、写真を活用してスタッフがその生態について説明しました。

コロナ禍のため短めな研修会でしたが、房総丘陵

の秋の自然をしっかりと学ぶことができました。個人的には27日の帰りの車中でヤマビルに首筋を吸われ、血が止まらなかったのが思い出です。参加された団員の皆様は大丈夫でしたか?これも房総丘陵の自然の現状です。ヤマビルが長靴にくっついた方が多数見られましたが、これに懲りずに研修会へご参加いただけると幸いです。

(大木 淳一 千葉県生物多様性センター)



トランシーバーから離れないヤマビル



小川で生き物を観察する様子



クロメンガタスズメの幼虫



源流に生息するタゴガエル

文化の日千葉県環境功労者表彰を受賞 千葉シャープゲンゴロウモドキ保全研究会

令和3年11月3日（水）の文化の日に、千葉シャープゲンゴロウモドキ保全研究会が文化の日千葉県功労者表彰の環境功労者として表彰されました。

これは、同会が長年にわたって取り組んできた絶滅危惧種であるシャープゲンゴロウモドキの保全活動の功績が認められたものです。同会は平成15年の発足以降、生息状況の継続的な調査、生息環境の保全・回復作業、外来種対策、地域の小学校への環境教育活動など、多岐にわたる活動によりシャープゲンゴロウモドキの保全に尽力されてきました。

また、千葉県における絶滅危惧種の回復事業として取り組んでいる「千葉県シャープゲンゴロウモドキ保全協議会」の一員として、「千葉県シャープゲンゴロウモドキ回復計画」の策定や各種保全事業の推進など、当センターと共に保護回復の実施に携わってきた団体でもあります。

この表彰は昭和23年に文化の日が制定されたのを機に始まり、今回で74回目となります。今年度は環境功労者を含む16功労で59名6団体が受賞されました。

表彰のご紹介とあわせて、お祝い申し上げます。

(西川 歩美 千葉県生物多様性センター)



千葉県の希少種

ニホンザル



(千葉県レッドリスト・重要保護生物B)

ニホンザルは昔ばなしやことわざなどにも登場する、日本人にとってなじみの深い動物です。一方で、近年は全国的に農作物被害や市街地への出没などで、テレビや新聞を賑わせている存在でもあります。千葉県でもこれらの問題は発生しており、対策のために捕獲も実施されています。しかし、実は千葉県のニホンザルは千葉県レッドリストで重要保護生物に選定されている希少種なのです。サルが増えすぎて問題になっているのになぜ？と思われる方も多くいらっしゃると思いますが、千葉県のニホンザルは他県とは異なる特殊な事情をかかえているのです。

日本に生息するサルは本来ニホンザルのみですが、千葉県には他に、特定外来生物のアカゲザルが生息しています。ニホンザルは県中南部、アカゲザルは県南端部に生息しており、両種の生息域は離れています。しかし、サルには、オスが自分の生まれた群れを離れ、遠く離れた群れへ移動して子孫を残すという習性があり、オスが両種の群れを行き来して交雑していることが確認されています。さらに、アカゲザルの遺伝子を持った交雑個体がニホンザルの群れの中で子孫を残すことで交雑が広がり、純粋なニホンザルの個体数が急速に減少していると考えられることから、2019年改訂の千葉県レッドリストでカテゴリーが要保護生物Cから重要保護生物Bへと引き上げられました。

県ではアカゲザルの完全排除を目指し、捕獲を行っています。また同時に、ニホンザルの群れからの交雑個体除去も進めています。交雑個体は外見で判断がつかない個体も多く、対策は簡単ではありませんが、千葉のニホンザルを守るための取り組みを進めていきます。

(西川 歩美 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No.72 令和4年1月15日発行

編集・発行 千葉県生物多様性センター（環境生活部自然保護課）

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2（千葉県立中央博物館内）

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

